

二〇一二年 度大会シンポジウム

専門家と信頼

関西倫理学会二〇一二年 度のシンポジウムは「専門家と信頼」というテーマで開催された。二〇一一年三月の震災とそれによく原発の事故で、原発に関わる専門家たちを信頼してきた多くの人が、イメージと現実の乖離にショックを受けた。事故後の報道や調査で明らかになったのは、リスクの軽視、慎重な検討の不足、緊急事態への対処マニュアルのいかげんさなど、素人目に見てもなぜ専門家がそんなことも思い及ばなかったのか、と訝かしむようなものであった。このような状況において、まず思いつくのは、当事者となった専門家の責任を追及し難詰することである。しかし、倫理学という学問の特性から考えるなら、やはり目の前の論争から一歩退いて倫理的思考の基礎に立ち返り、専門家と非専門家の信頼関係はどうあるべきかを再検討することもまた重要なのではないだろうか。今回のシンポジウムでは、このような問題意識を背景としつつも、あえてこのたびの震災と原発事故には話題を限らず、「専門家と信頼」

について、広い社会倫理の観点から考えなおしたいと考える。なお、ここでいう「専門家」は、専門職倫理でいうところの専門職（プロフェッショナル）を主に想定しているけれども、それよりも広い概念として使っている。「専門家」の対義語としては「素人」ないし「一般人」を使う。

現代の社会は多くの専門家の分業によって成り立ち、われわれは好むと好まざるとにかかわらず多くの専門家に頼って生きている。専門家によって建てられた家に住み、健康のトラブルがあれば医療の専門家に、法律のトラブルがあれば法律の専門家に相談する。専門家たち自身も自分の専門領域以外では素人である。要するに、専門家への信頼は、ハイテク化した現代社会の一員として生きていく上で不可欠の要素のようにも思われる。

他方、今回の原発事故を引き合いに出すまでもなく、人々が専門家を信頼し、専門家の仕事がブラックボックスとなること

で、思わぬ危険を呼び寄せている場合もある。専門家には均質な文化的背景や教育に由来するバイアスが存在することもよく指摘されており、そのせいでブラックボックスの中では一般人の感覚とかけ離れたことが行われているかもしれない。この観点からはむしろ「専門家任せにしない」ことが重視されるだろう。しかし、専門家任せにしない、と言っても限度がある。専門家は一切信用できないとなれば、自分で家を建て、病氣も自分で治すことになるだろう。

この状況はいくつかの切り口から考察の対象にできるだろう。まず、倫理学者の視点からは、こうした現代社会を分析するのに適した「専門家」や「信頼」の概念を規定するという作業や、その意味での専門家と一般人の間のあるべき関係について原理的な考察をするという仕事があるだろう。次に、制度設計者としての視点からは、もつと具体的なレベルで、望ましい社会を構築するためにはどのような仕組みがあるべきなのか、ということが問題となるだろう。たとえば専門職団体による自己統制やセカンドオピニオンなどの複数の専門家が関わることによる信頼の担保などが制度設計の例として考えられる。

他の切り口として、一人の専門家として現在の状況においてどう振る舞うべきか、という専門家の視点からの考察や、一人の一般人としてどう振る舞うべきか、という一般人の視点からの考察も可能である。特に、専門職倫理では、上記のような専門家と一般人の間の信頼の問題を踏まえて、専門職はどのような

な責任を負うか、その責任を未来の専門職たる学生たちにどのように教えるか、が問題となってきた。

以上のような問題意識から、本シンポジウムでは、一方では医療や技術業における専門職倫理の文脈から、専門家の責任と信頼の関係についての考察を行う提題を依頼し（板井孝老郎会員、大石敏広会員）、また他方では現代社会における「信頼」概念そのものを再検討するような提題を依頼した（丸山徳次会員）。以下に掲載するのは、お三方からの当日の報告に基づく論文と、当日会場で行われた討論の要録である。当日はそれぞれに迫力ある提題に、会場からも熱のこもった質問があげられ、大変密度の濃い討論の場となった。こうした議論をここで終わらせることなく、粘り強く続けていくことは、倫理学の専門家たるわれわれの現代社会における責任の一つのありかたであろう。

（伊勢田哲治・徳永哲也）